

八尾市芸術文化振興審議会ワーキング部会
報 告 書

芸術祭の開催構想（案）について

1. 検討経過（令和7年11月20日～令和8年3月19日）

- 設置目的：2028年度（令和10年度）の芸術祭開催に向けた具体的な「開催構想案」を策定する。
- 検討状況：全5回の部会を経て、開催目的・趣旨、名称、ターゲット、開催規模等についての合意形成を図った。

開催日	内 容
令和7年11月20日（木）	八尾市で初めて実施する芸術祭について、どんな方向性でやっていくのか、既存の芸術祭の概要や審議会委員の言葉等をもとに話し合った。
令和7年12月18日（木）	芸術祭の開催に向け決めていく事項（企画・基本方針に関する事項等）について話し合った。
令和8年1月15日（木）	・5～6人ずつでグループワークを実施。 ・企画・基本方針に関する事項（最も基本的で重要な事項）として、次の項目について、自由に意見交換を行った。 【①目的・趣旨、②テーマ・コンセプト、③ターゲット、④芸術の種類、⑤開催規模・達成したい目標、⑥名称】
令和8年2月19日（木）	グループワークで出た意見を取りまとめ作成した、芸術祭の開催構想（案）について、協議を行った。
令和8年3月19日（木）	・①開催目的・趣旨、③ターゲット、④芸術の種類、⑥名称、⑦芸術監督について、部会としての案を決定。 ・②タグライン、キャッチコピー、⑤開催規模・達成したい目標は継続審議とすることを決定。

2. 芸術祭の名称と開催目的・趣旨 ⇒決定

◆ 名称：やおまちかど芸術祭 ⇒決定

選定理由：

「まちかど」という言葉により、日常生活の延長線上で気軽にアートに触れられるイメージを提示。

これは、条例のテーマである「有機的なネットワークと裾野を広げる」イメージに合致する。

また、「八尾」をひらがな表記にすることで、富山県八尾（やつお）町との差別化と、柔らかい親しみやすさを強調。

◆ 開催目的・趣旨（3つの柱） ⇒決定

- **日常の中の「余白」と「出会い」**：日々の生活にアートの「余白」（心のゆとり、創造性が入り込む隙間）を創り、新しい自分や価値観に出会うきっかけを提供する。
- **市民が主役（自分事化）**：市民が出演・制作側だけでなく、運営参加や「自分事」として関わる形をめざす。
- **ごちゃまぜの交流**：世代、国籍、分野を超えた化学反応を楽しむ。

3. タグラインとキャッチコピー ⇒ 継続審議

① 言葉の定義と役割の整理

部会において、芸術祭のブランド構築のために、以下の使い分けを行う方針を確認した。

➤ タグライン（理念や核となる言葉）

芸術祭の理念を10～15文字程度の短いフレーズで表現するもの。回を重ねても変わらない「核」となる言葉。

➤ キャッチコピー（販促的な言葉）

その時々々の企画やトレンドに合わせ、ターゲットの心をつかむための販促的な言葉。複数あってもよいし、毎回柔軟に変えていってもよい。

② タグライン案：理念を凝縮した言葉

八尾市版文化的コモンズである「やおうえるかむコモンズ」の理念を表すタグラインと、芸術祭の理念を表すタグラインは同じものでよいか、別のものとしてすみ分ける必要があるか。また、別のものでも考える場合、それぞれ、どんな言葉が適しているか等について、検討した。

➤ 「やおうえるかむコモンズ」のタグライン：アートをまたぐ、まちをつむぐ ⇒ 継続して使用する。

「やおうえるかむコモンズ」の活動理念と直結しており、場所、ジャンル、世代、国籍などの「境界をまたぐ」姿勢と、それによって「コミュニティをつむぐ」というストーリーをうまく表している。

➤ 芸術祭のタグライン候補（委員がタグラインとして考案したもの） ⇒ 継続審議する。

- 八尾の地図に、アートの余白
- モノづくりの街で、ココロ創りの芸術
- あんじょう ⅠⅠまち 八尾のまち

③ **第1回（2028年度）キャッチコピー案（委員がキャッチコピーとして考案したもの） ⇒継続審議する。**

初回開催のインパクトと、SNS等での「フック（引っかかり）」を意識した候補。

➤ **存外八尾w（ぞんがいやお）**

「意外にいいやん、八尾」という驚きをネットスラングを交えて表現。回を重ねると、「俄然八尾」に変わるだろう。

➤ **八尾覚醒。アートは止まらない。**

初めての本格的な芸術祭としての「目覚め」と、今後の継続性を象徴。

4. ターゲット ⇒決定

「のっぺらぼう（抽象的な誰か）」ではなく、顔の見える「個」へ届ける。

カテゴリ	具体的なターゲット像
メインターゲット	八尾市民、子ども、アートに関心が薄い層（自分事化を狙う）
サブターゲット	市外からの来訪者、アーティストのファン（ファン化と再発見）
波及ターゲット	万博来場者、SNS層（新しいブランドイメージの発信）

- 内から外へ：まず市民が熱狂し、その熱に惹かれて市外の人がやってくるという流れを意識している。
- 八尾市民を中心に、八尾に関わるすべての人が「ふと参加したくなる」芸術祭
- まずは市民、そこから八尾に興味を持つ人へ広がっていく芸術祭

5. 芸術の種類 ⇒決定

➤ 「場所」と「物語」をつむぐアート

特定の場所に根ざした「サイト・スペシフィック・アート」や、アーティストが八尾市に滞在し、八尾の歴史や文化を吸い込んで制作する作品、まちかどのシャッター、公園の立体作品など、美術館を飛び出し「まちの風景に溶け込む作品」を展開。口コミを生むよう、一定期間じっくり鑑賞できる展示を主軸に据える。

➤ 五感に響くパフォーマンスとお祭りのような高揚感

音楽、舞台芸術、演劇、そして八尾の伝統文化である「河内音頭」のパレードなど、「お祭りのような高揚感」を演出する。

プロのパフォーマンスに市民が制作プロセスから関わったり、食のイベントを掛け合わせたりすることで、アートに詳しくない層も自然に惹きつけ、コミュニケーションが生まれる場を創出する。

➤ 本物と市民性が混ざり合う「共創アート」

第一線で活躍するプロの「本物」を誘致しつつ、外国人、子ども、障がいのある方など、多様な市民が主役となる表現をミックスする。

6. 開催規模・エリア・時期 ⇒ 継続審議

① 分散型と集中型が提案され、様々な意見が出た。

- 分散型案：季節（春夏秋冬）ごとにエリアを分けて開催。
- 集中型案：特定の期間に集中させ、インパクトを重視。

【意見】

- 秋に数多く実施しているイベント（まちかどライブクリエイション）を分散させるイメージだ。
- いろんな地域とつながるといところを重視したい。地域の人たちをスタッフとして巻き込むからこそ成果がある。
- 芸術祭は何年かに1回の特別なものなので、まちかどライブクリエイションでやっていることを散らばらせるということだと、どれだけ差別化できるのか。一般の人が芸術祭をやっていると気づけるか。
- まちかどライブクリエイションと今回の芸術祭は、別物としてすみ分けて開催するべきだ。
- メインに大きいものを秋に置いて、そこにつながっていくストーリーをプレイベント的に開催し、最終的に大きな打ち上げのような形にすれば、分散しないで行けるのではないか。

② 部会での議論の結果

ストーリー性を持たせた「フィナーレ構造（ハイブリッド型）」を中心に、継続して議論していく。

- 単発のイベントで終わらせず、各地域でのプレイベント（点）を積み上げ、最終的に大きなフェス（面）へとつなげる。
- 初年度の成功体験とインパクトを重視し、メイン期間はある程度の集中開催とする。

③ 会場候補

プリズムホールを本丸としつつ、八尾空港周辺（大阪府中部防災拠点）、町工場、寺社、商店街など、八尾のポテンシャルを活かせる場所を選定していく。

7. 芸術監督 ⇒決定

八尾市芸術文化振興審議会の委員であり、アートコーディネーター養成講座の講師である小國陽佑氏に、本芸術祭の芸術監督に就任いただく予定。小國さん了承済み。

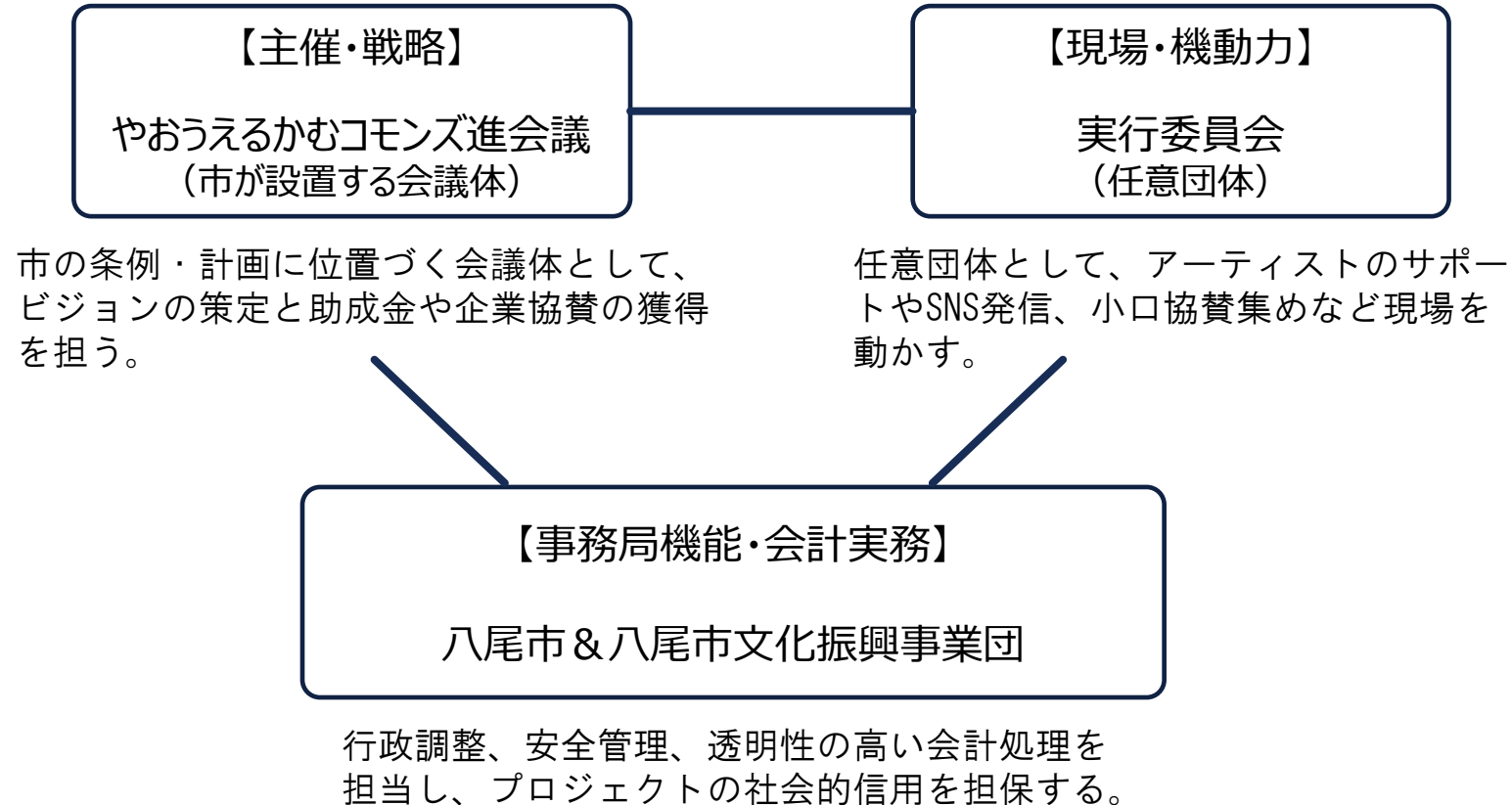
【小國陽佑氏 プロフィール】

- ・ 1984年生まれ、兵庫県出身・在住。
- ・ 主に関西を拠点にアーティストの表現活動の支援を行う。
- ・ ギャラリーなどのホワイトキューブとは異なる様々な場（空き家や空き地、産業遺産、一時的に使用停止している場所など）を舞台とした芸術祭やアートプロジェクト、オルタナティブスペースの運営に携わる。
- ・ アーティストの表現の可能性の拡張と共に、様々な人にとっての停留所や寄り合う場所としての可能性も思考している。
- ・ ディレクターやキュレーターとして関わった近年の芸術祭・アートプロジェクトとして、下町芸術祭（2015～）、神戸六甲ミーツ・アート（2024～）、生野ルートダルジャン芸術祭(2020～)、学園前アートフェスタ（2020～2022）などがある。



8. 運営体制 ⇒ 継続審議 ※事務局機能、会計実務を担う体制については市・事業団で協議を継続。

「市民主体」を「行政の安定性」で支える、八尾独自のハイブリッド体制



◆ 今後の主な検討課題

ワーキング部会での議論を経て、以下の点を今後の主な検討課題とする。

➤ 企画の具体化と予算計画

検討中の各アイデアについて、実現可能性と費用対効果を評価し、具体的な企画内容を詳細化する。

また、これに基づき、概算予算を策定し、財源確保に向けた具体的な計画を立てる。

➤ 具体的な達成目標の設定

「盛り上がっているという感想を持ってもらいたい」、「種をまいて育てていく」という定性的な目標はあるが、開催の成功を測る基準が未定。

➤ 関係機関との連携強化

地域団体、学校、企業など、多岐にわたる関係機関との連携をさらに深め、実務レベルでの協力体制を構築する。

➤ 住民参加の促進と広報戦略

より多くの住民が企画段階から参加できるような仕組みを検討し、イベントへの関心を高める効果的な広報戦略を立案する。

➤ 持続可能な運営体制の確立

一過性で終わらせず、長期的に地域文化を醸成していくための組織体制や人材育成について検討を進める。